

矢作川流域圏懇談会通信

R1 海部会編
vol. 2



発行日：令和元年10月
編集・発行：矢作川流域圏懇談会 事務局

◆第41回海部会WGを開催しました！

9月18日（水）に第40回海部会WGを開催しました。

今回のWGでは、国土交通省三河港湾事務所が取り組まれている環境改善の取り組みとモニタリング調査について話題提供をいただいたほか、今年の夏の海の環境について吉田漁協の石川組合長から説明いただきました。



日時：R1年9月18日（水） 13:30～16:00

場所：西尾市役所会議棟 第3会議室

参加人数：20名（事務局を含む）

◆主な活動内容

1. 三河港湾事務所における海の環境改善の取り組み

- 三河港湾事務所は昭和39年9月に東海地方を襲った伊勢湾台風によって被害を受けた衣浦港一帯を台風、高潮等による災害から守るために設置された事務所です。
- 元々は工事事務所であったことから、主に防波堤や岸壁を作ったりして、船が着岸するというを手助けする設備を整備していました。それに伴って、船が入ってくるために海底の浚渫も実施しています。
- 環境に関連する事業としては、平成10年～16年にかけてシーブルー事業という名称で中山水道航路の浚渫工事で発生した砂を活用して、干潟・浅場の造成を実施しています。
- 事業の実施に伴い、平成26年頃まで造成した干潟や浅場のモニタリング調査を実施してきました。その結果、バカガイやガザミなど生物の生息場として機能していることが確認されました。
- また、大規模な埋め立て直後と比較すると低湿環境は改善された評価しています。
- 現在、環境に関する取り組みとしては、伊仙湾海域検討会、三河湾部会を設置し、様々な議論を行いながら、伊勢湾再生のメニューを検討しています。
- その一つが、岸壁整備などで発生した土砂を活用した干潟造成であり、造成後は生物の生息状況や地形の安定状況についてモニタリング調査を実施しています。

【吉田漁業協同組合 石川甚右衛門組合長からの話題提供】

- 毎年六条潟に稚貝を採取に行って、自分たちの漁場に放流し、育て、収穫するという養殖を行っており、今年の稚貝がどのように成長しているか、その8月に採集したものを今日は持ってきました。今のところは無事成長しているように見えますが、この2、3年は放流した貝が11月、12月になると消えるということが連続していました。
- その原因を追究するため愛知県の水産試験場に協力してもらい調査してきた結果、前回の発表でもありましたように、滋養不足が一番の原因ではないかというところまで結論付けることができます。
- 今年の7月と8月の水質のグラフを用意しましたが、7月24日にトリガイ・バカガイが死んだと書いてありますけども、この時の貧酸素でトリガイはほとんど全滅しました。バカガイもここで死にましたね。アサリも若干死にました。
- 8月30日、31日に、我々業況と愛知県水産試験場の方と一緒に資源調査を実施したところ。こんなに貝がない砂浜を見たのは初めてだなというくらい、何もいませんでした。
- 他の地域の貝の状況としては、渥美湾の方は肥満度が知多湾と違い、漁獲が好調で特に福江湾ではかつてないほどの状況で出荷量も多いと聞いています。東幡豆では海岸線が山の石ころの漁場では、貝が生息していて、潮干狩りのお客さんに喜んでもらっているとのこと。佐久島の方も、この増量放流に伴う等の環境が良かったのではないかと、そんな部分的ないいところも現実あります。
- 特に今は、事業関係によって環境整備していかないことには、回復は見込めないかなと、そんなふうに感じています。





2. 話し合い（・意見 回答）

- 三河港湾事務所の説明資料をみて、三河湾のイメージがかなり整理できた。日本行政の姿からをみると、国交省をベースにした対策や評価、メンテナンスが一番わかりやすいように見える。三河湾の環境問題を国交省が主体で実施するのが安心できる（浅田）。
- 愛知県の三河湾というのは、かなりこう特徴がある。産業としても、港としても一、二番の港が三河の奥にあり、かつ、自然が多く残されているというところがポイントだと思う。すべて国土交通省で対応できるものではない。愛知県をはじめ関係機関と連携する場が大事だと思う。（河合）
- この三河湾を見て、これだけ人間のインパクトで右に振れたり左に振れたりした湾はないと思う。埋め立て、浚渫で、汚濁負荷量が上がリ、貧酸素・赤潮で大変な時期があり、今度は下水道を作って負荷を下げた。今度はエサ不足、アサリも獲れないと。そういう人間のインパクトがすごく効く海だからこそ、やはり国の機関である国交省も他省庁をあまり意識せずに、国交省の立場としてインフラ整備と海の環境保全を両立できるような動きをしていただきたい。（鈴木）
- 三河港湾事務所も海そのものの管理者ではない。港湾とかも海岸の管理者であって、海そのものの管理者がいないのが問題じゃないのかと思う。河川は水面も含めて河川管理者がいる。海っていても、海岸であって、あくまで海そのものの管理者がいないって、本当は国土管理としては問題ではないかと思う。（井上）
- 今いろいろな環境対策をやられているのは、海の管理者というよりむしろ、いわゆる保障行為としてやっている部分がきっと多い。管理者として、環境の改善というのができていないのが問題なのかなという面がある。もっと堂々と責務としてできるようにならないといけない時代が来るのではないかと思う。（河合）
- 今までの縦割りの中での海全体の環境をどこまでどうしたらいいのかという話、特に超長期的な話はできなくなっている。湾全体のあるべき姿を50年、100年先まで見込んで、手を打っていくのかってということが問われるのではないか。そのあたりは市民部会の役割であって大事なことだと思う。（鈴木）
- 石川組合長が言われた近年のアサリ減少は栄養塩不足が原因だということを地元の漁民、研究者、専門家、行政が同意というか、周知されているのかという疑問がある。また、仮に原因がわかっているなら、なぜ直ぐに対策ができないのかと思う。（浅田）
- 栄養不足の話は三河湾、伊勢湾だけの問題ではなくて、瀬戸内海ではかなり前から各県の水産研究所等が調査を実施し、データが積み上げられた結果、きれいな海から豊かな海へと表題が変えられてきた。また、政治的な動きもあって、窒素・リンの環境基準については下限値を設けることで調整が進められている。最近の学会の流れは、やはり栄養不足というのはベースにあるという認識はかなり強くなってきた。私の感じでは、ただそれに対して政治が、まだ動きが、足並みがびちっとそろえてない、つまり県レベルで国に対してもっと要望を上げる。また県議会の中でもそういう話題になるというようなインパクトがないと難しい。（鈴木）
- 研究者がはっきりわからないと言っている状態なら、なおさら現物の実験をやったデータで試せばよいのではないか。（浅田）
- それは漁業者も同じ思いである。こういう状況が5年間だけで起きたその理由に、栄養不足があることはほぼ間違いないのに、なぜ手が打てないのかと。特に西三河は、アサリ漁業で成り立っている。地元の愛知県が動かないと。もっと積極的に、特区でもいいからそこだけは1を2にするとか。管理運転も10月から3月まで赤潮出たら困るなどと言ってなくてやってみるとか。やはりそのくらい機動的にやらないと、時すでに遅しになってしまう。（鈴木）
- 今回下水の管理運転の効果調査をやっている中で、下水処理水の中でもケイ酸の濃度が非常に高い。しかも河川水よりも高い濃度で出てきている。やはり海域のプランクトンの生産力を上げるにはケイ酸が力になっていることがわかってきた。試してみてもわかることもあるので、実施することが大切だと思う。（蒲原）
- 内湾ではきれいで豊かな海が実現できると思っている。干潟や浅場が広がり、そこにアサリなどの浄化生物が多く生息すれば、陸域から色々なものが入ってきてきれいになる。見た目もかなりきれいになり、かつ生き物も豊かになる。今は陸域からの負荷を下げすぎて見た目はきれいだが、豊かさが無い。行政がもっと理解を深めて、政策の舵をきる必要がある。（鈴木）



今後の流域圏懇談会の予定

- 海部会第42回WG（日時）令和元年11月5日（火）午後
内容：1）矢作川浄化センターの視察 2）海に関する年表作成について

◆お問合せ◆

矢作川流域圏懇談会事務局

〒441-8149 愛知県豊橋市中野町字平西 1-6 国土交通省豊橋河川事務所 事業対策官 神本、指導員 宇野
TEL 0532(48)8107/FAX 0532(48)8100

*矢作川に関する情報は、矢作川流域圏懇談会メーリングリスト（yahagigawa@ijnet.or.jp）までお送りください。

